藤沢市
藤澤浮世絵館
FUJISAWA UKIYO-E MUSEUM

浮世絵館だより

2021年
3月
Vol.14

もくじ

展示紹介

相模を舞台にした歌舞伎と浮世絵　白浪五人男・曽我物語 ……P1
歌舞伎と浮世絵のかかわりと画題 ……P2
「五十三駅看立双六」に見る宿場と歌舞伎の“見立”ストーリー ……P3
浮世絵こぼれ話11 ……P5
二代目オニカゲ学芸員のページ／浮世場なれ／編集後記 ……P6

相模を舞台にした歌舞伎と浮世絵
白浪五人男・曽我物語

会期　2021年3月20日(土/祝)～5月5日(水/祝)

歌川国明「題名不詳(『青砥稿花紅彩画』より白浪五人男)」

歌舞伎には相模地域を舞台にした演目が多数あり、藤沢では、江の島や遊行寺など歌舞伎のストーリーや事件の場所として度々扱われています。遊行寺ゆかりの小栗判官の物語は、江戸時代から現代まで人気の演目として上演されており、藤沢は関わりの深い地域といえます。

本展では、「白浪五人男」「曽我物語」を中心に、相模を舞台にした役者絵をご紹介します。また、各宿の風景を背景に、ゆかりのある歌舞伎の登場人物を演ずる人気役者の姿を大きく描き、幕末期に高い人気を誇った歌川国貞(三代豊国)の作品、通称「役者見立東海道」から相模地域を中心に展示します。

歌舞伎と浮世絵のかかわりと画題

図１　一筆斎文調「三代目大谷廣次の早野勘平 初代中村松江の女房おかる」

歌舞伎と浮世絵には、どちらも江戸で花開き、庶民が発展させた文化という共通点があります。特に歌舞伎は、江戸の人々にとって最大の娯楽でした。歌あり、踊りあり、アクションありと当時のエンターテイメントの集大成であったともいえます。

歌舞伎は当時、吉原の遊郭とともに「江戸の二大悪所」と幕府ににらまれていました。しかし、とがめられるほど魅力を感じてしまうのが人の性（さが）なのか、江戸の人々が高い関心を寄せたことから、浮世絵の格好の題材となり、歌舞伎の役者を描いた「役者絵」という浮世絵の主要なジャンルが誕生していきました。

役者絵は時代が進むにつれ、変化と細分化を遂げていきます。18世紀中ごろまでは、浮世絵師は、役者の顔を描き分ける意識が薄く、書き込まれた名前や役名・役者紋で役者を区別していました。役者の顔の特徴を捉えて描くようになったのは、明和期（1764－72）末あたりからです。一筆斎文調（いっぴつさいぶんちょう）（生没年不詳）は、早くに役者の似顔（にがお）を取り入れた絵師のひとりで、役者絵の変化期の絵師として知られています。文調は、特に役者錦絵が多く、図１は細版と呼ばれる判形で描かれた「三代目大谷廣次の早野勘平 初代中村松江の女房おかる」です。本図は、「仮名手本忠臣蔵」の合間に組み込まれた舞踊劇「道行旅路の花聟（みちゆきたびじのはなむこ）」の様子が描かれています。この「道行旅路の花聟」は、現在でも歌舞伎所作事（しょさごと）の代表的な演目として上演されています。勘平・おかるが東海道から山城国へ落ち延びていく道行が題材であり、場所は現在の横浜市戸塚区の山中と設定されています。

図２は、「曽我物語」に登場する兄弟の兄・曽我十郎祐成（そがのじゅうろうすけなり）と弟・五郎時致（ごろうときむね）が描かれています。曽我物語には、小田原や箱根など相模にゆかりのある話が多く残っています。歌舞伎でも人気の演目として、「曽我もの」という一大ジャンルがあるほどです。この兄弟は、正反対の性格であったことから、どのような演目でも荒事（あらごと）には弟、和事（わごと）には兄と決まっています。また、着物の模様も必ず、兄は千鳥、弟は蝶の柄を身に着けています。

本図は柱に飾ったり、柱の節を隠すために、細長い「柱絵（はしらえ）」という判型で描かれています。絵師の磯田湖龍斎（いそだこりゅうさい）（1735－没年不詳）は活動時期が柱絵の流行とちょうど重なったため、浮世絵界で最も多くの柱絵を手掛けた人物として知られています。

図２　磯田湖龍斎「題名不詳（曽我兄弟）」

「五十三駅看立双六」に見る宿場と歌舞伎の“見立”ストーリー

図１　歌川国貞「五十三駅看立双六」

図１は、歌川国貞(三代豊国)作の「五十三駅看立双六」です。この双六は同じく国貞作の大判錦絵による通称「役者見立東海道」シリーズ(図６・７)と合せて嘉永５年(1852)に発行されたもので、シリーズの図柄を縮小してマスに並べたものです。このシリーズは、各宿場の地名や故事にちなんだ歌舞伎の登場人物が、当時の役者の似顔で描かれ、背景には歌川広重の「東海道五拾三次(保永堂版)」の構図が用いられたものもあって、大いに売れ、五十三次(正編)55枚の発行ののち、続編として間の宿(宿場と宿場の間の名所等)が追加されて、目録を含め140枚の図柄が発行されました。

宿場名と並んで役者名が記されているので何の演目であるかとともに、出演していた役者も判るという、歌舞伎ファンの人気を集めたシリーズでした。双六には正編発行時の五十三次プラス日本橋・京都の55枚が描かれていますが、同じ話の役同士は向き合って描かれるという心憎い構成も見られます。

図２　「五十三駅看立双六　川崎　白井権八」

図３　「五十三駅看立双六　品川　幡随院長兵衛」

図５　「五十三駅看立双六　戸塚　早野勘平」

図４　「五十三駅看立双六　程ケ谷　妙おかる」

図３(マス２)の品川は幡随院長兵衛、図２(マス３)の川崎は白井権八で、この二人が絡むのは、「浮世柄比翼稲妻」のうちの「鈴ヶ森」の場(「御存知鈴ヶ森」)。話の舞台は鈴ヶ森なので、品川が長兵衛ゆかりの地。権八は隣の川崎宿に描かれています。お話では、長兵衛は江の島詣の帰り道となっており藤沢つながりで興味をひかれます。

図４(マス５)の程ケ谷は妙(腰元)おかる。図５(マス６)は戸塚は早野勘平で、「仮名手本忠臣蔵」の「道行旅路の花聟」。「仮名手本…」は江戸を鎌倉に見立てたストーリーなので道行の舞台は戸塚。隣宿ということで、おかるは保土ケ谷宿に描かれています。

図7　「東海道五十三次之内 平塚 万長娘お古ま」

図6　「東海道五十三次之内 藤沢 小栗判官」

図9（マス7）の藤沢は小栗判官、図8（マス8）の平塚に万長娘お駒ということで、「當世流小栗判官」。古来の説教節などの小栗判官物語の小栗は毒殺されていったん地獄に墜ちて餓鬼阿弥になりますが、歌舞伎では小栗にフラれたお駒の恨みで病気になるという設定で、そのお駒が隣の平塚宿に描かれています。お駒の背景に大磯の高麗（こま）山が描かれているので、こちらの「こま」との語呂合わせも関連がありそうです。

マス10の小田原は飯沼勝五郎。隣のマス11の箱根には勝五郎妻初花が描かれます。話は「箱根霊験 誓 仇討」の「瀧場」。舞台の終幕に、箱根の山中で箱根権現に願かけし、滝にうたれて水垢離をとり一心不乱に祈りを捧げた初花の信心によって夫の病が癒え、仇討の本懐を遂げるという話です。

図8　「五十三駅看立双六 平塚 万長娘お駒」

図9　「五十三駅看立双六 藤沢 小栗判官」

マス13の沼津の荷持平作とマス14の原の呉服屋十兵衛が絡むのは、日本三大仇討の一つに材を採った「伊賀越道中双六」「沼津の段」です。他にもマス19江尻・弥次郎兵衛とマス20府中・喜多八の「東海道中膝栗毛」、マス28袋井・狐忠信、マス29見附・静御前は「義経千本桜」「道行初音旅」で、静御前が持つ鼓の皮になった母親（お袋）を慕う狐忠信から「袋→袋井」の連想。マス41鳴海の景清娘人丸とマス42宮の悪七兵衛景清（歌舞伎十八番「景清」で、景清の妻・阿古屋の娘が人丸）などがあります。上がりである最後の（マス55）京都「楼門五三桐」で、石川五右衛門と真柴久吉（豊臣秀吉）が楼門（山門）の上下で対峙する様が描かれています。ちなみに、大判錦絵での役者見立東海道シリーズでは正編は五右衛門、久吉は続編で「京ニ 真柴久吉」として描かれています。

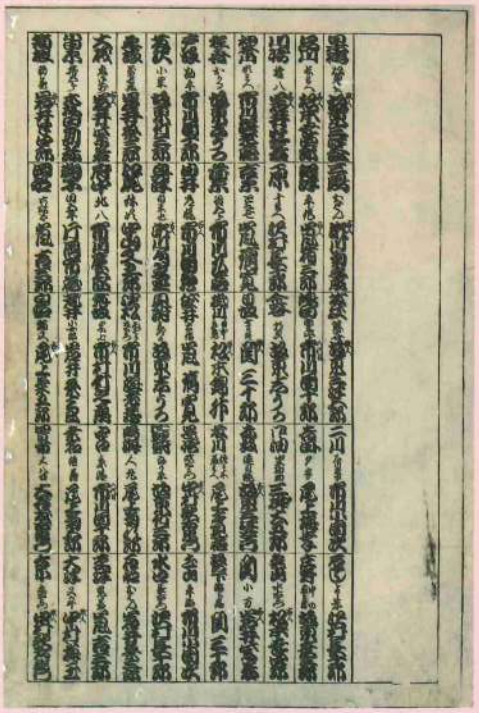

図10　作者不詳「東海道五十三次内 目録」（校合摺り）

なお、「役者見立東海道」に描かれた役者の似顔の同定は、愛好者の楽しみのひとつですが、実はシリーズの「目録」の摺物には故人の役者も含め、描かれている役者の一覧が記載されています。図10は、シリーズの「目録」の校合摺り（制作年不詳）で、こうした摺物も出回っていたようです。

浮世絵こぼれ話11

二代歌川国久「源頼朝公富士之裾野牧狩之図」

「曽我兄弟の仇討」は源頼朝による「富士の巻狩り」が行われている中で起こった事件として、鎌倉時代に編まれた歴史書『吾妻鏡』に残されています。頼朝は建久４年(1193)５月に、多くの御家人を集めて富士の裾野(現在の朝霧高原一帯)で巻狩りを催しました。巻狩りとは、狩場を四方から取り囲み、中の獲物を追い込んで捕える狩りのことで、狩猟の楽しみだけでなく軍事訓練も目的のひとつとされていました。

本図に描かれているのは、その巻狩りの最中に暴れ狂った猪が頼朝を目掛けて突進してきたところを、傍にいた仁田四郎忠常が退治する場面です。

画面中央、大きな猪に跨った勇ましい武士が、今にもその獣の胴を刺さんとばかりに刀を振りかざしています。この人物が忠常で、人物の上部に見られる赤い短冊にもその名前が記されています。頼朝は画面左奥で馬に乗り、成り行きを見守っているかのように描かれています。なお、曽我の仇討の仇役である工藤左衛門尉祐経は、画面右側の丘で獲物を狙っています。武将たちの周りで竹を持って動物を追い立てているのは、巻狩りで獲物となる鳥獣を追い込む役割の勢子という人々です。

図をよく見てみると猿が鹿に乗って喧騒を横目に走り去ろうとしていたり、狸が勢子を驚かしていたりと、中心人物以外がコミカルに描かれています。富士の巻狩りは浮世絵の武者絵で人気の題材となっており、忠常については本図のように猪に跨る様子で描かれることが多い一方、その周辺に描かれている人物や動物については絵師によって表現が異なっています。同じ題材をとった浮世絵を比較する際に「お決まりの型」が何であるか探してみると、同時に絵師の工夫が見えてくるようになります。

※「巻狩り」と「牧狩」の違いについて…江戸時代は読みがあっていれば漢字にこだわりがなかったと考えられています。そのため「巻狩り」も本図のように「牧狩」と表記する場合がありました。

二代目オニカゲ学芸員のページ③
「展示ができるまで」

前回展示「市制施行80周年　藤沢トラフィック―浮世絵の道から鉄道と道路の記憶―」では姉妹展示として、「市制施行80周年記念　藤沢トラフィック　鉄道のおもいで」を市民ギャラリー常設展示室で同時開催しました。この企画は、私が学芸員として初めて担当した展示でした。こちらでは、藤沢の交通(トラフィック)の歴史を鉄道資料から紹介し、昭和初期の小田原急行鉄道開業当時の姿を描いた鳥瞰図(ちょうかんず)や、大正から昭和にかけて作られた、モダンなデザインがあしらわれた駅弁の掛け紙なども、当時の鉄道文化を知る重要な資料として展示しました。

まさか、初めての担当が浮世絵ではなく、鉄道資料だとは夢にも思いませんでした。というのも、何を隠そう、私は鉄道資料に触れたのは今回が初めての経験だったのです！

当館では、展示ごとに担当学芸員が中心となって、準備を進めていきます。学芸員にはそれぞれ専門分野がありますが、実際には専門外の企画を担当することもしばしばで、私はまさに、いちから所蔵資料を調べる作業を始めました。記念切符や、鉄道会社の社報など、こんなものまで！？　と思うような資料を収蔵庫から発掘しては調べの繰り返しで、当初は、やみくもに展示構成を練る毎日でした。そうして、鉄道資料と自分の専門分野でもある鳥瞰図との共通性を見出し、だんだん得意な分野の視点へと資料を選定したことで、あの展示構成へと行き着いたのでした。また、展示資料をより深く知るために、現地調査(？)と称し、展示で取り上げた大船軒のサンドウィッチと鯵(あじ)の押し寿司を実際に食べ、鉄道を取り巻く歴史をお腹にもバッチリと入れました。

展示の裏には、企画者のドラマあり。どの企画にも、学芸員の熱い思いが詰まっています。さて、今回の展示は‥‥！？

編集後記

相模地域や藤沢、江の島が舞台、または関わりをもった歌舞伎の話は多々あります。浮世絵は、その生誕のころから歌舞伎とは切っても切れぬ存在であり、自然に役者絵の中には相模地域、江の島などが多く描かれています。美術や歴史だけではなく郷土史の視点で眺めてもまだ広がりがもてる浮世絵と歌舞伎の世界には驚くほどの情報が詰まっている証でもあり、それが現代でも人気がある理由の一つなのかもしれません。

編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館

【住所】〒251-0041 神奈川県藤沢市辻堂神台２丁目２番２号ココテラス湘南７階
【電話】0466-33-0111　【FAX】0466-30-1817
【開館時間】10:00～19:00（入館は18:30まで）
【休館日】月曜日（祝日、振替休日の場合は翌平日）
※その他、展示替えのために休館日がございます
【ＨＰ】 藤沢市藤澤浮世絵館 で検索

facebook：藤澤浮世絵館 公式アカウント
⇦このマークが目印です。「いいね！」お願いします。